

第10回「日本語大賞」

テーマ「忘れられない言葉」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「本当の強さ」

東京都

南多摩中等教育学校

1年 小國 由梨奈

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

幼い頃から、私は初対面の人に「真面目過ぎる」「冗談が通じない」というイメージを持たれたり、陰ながら言われたりといったことが多くあった。自分からすればそう思われるように振る舞っているつもりはまったくなく、「あのひとは真面目だから……」と堅苦しく思われていた。

そんな私が小学五年生のときに出会った言葉が『笑われて、笑われて、強くなる』という、文豪太宰治の名言だった。

担任の先生が変わってしばらくした頃だったと思う。体育の授業の鉄棒で、五年間恐怖で挑戦できなかった技に挑戦してみたが、手をすべらせてしまい、みんなが見ている前で落ちたことがあった。そのときの私はショックで混乱しており、みんなが見ているという事に気がついていなかった。だから余計に印象に残っている。その新しいクラスの中でも目立つ女子のグループの人たちが、大きな声で私を指差しながら笑いはじめたのだ。

その人たちとは特別仲が良かったわけでもなく、仲が悪いわけでもなかったが、みんなの前で笑い物にされたのは初めてだったのでしばらく放心状態だった。その日の放課後は前休んでいて受けていなかったテストを教室で解いていたのだが、その間にもそのときのことを考えていた。そのとき、新しい担任の先生が教えてくれたのが『笑われて、笑われて、強くなる』だったのである。先生は他の人のことを見ながら、体育の授業中私のことも見ていてくれたのかもしれない。テストの丸つけをしながら一言、という感じだったと思う。先生とは二か月も経っていないくらいに付き合っていたが、先生は私に、自分でその言葉の意味を考えることをさせてくれた。

それから私は、日々生活を送りながら、先生が教えてくれたその言葉の意味を考えていた。笑われたことを気にしていた私に何を教えようとしてくれたのだろう、と思っていた。

そして、六年生になってクラスでいじめの問題が起こり、先生に反抗する人が増えてきて荒れはじめたころ、私は笑われることで人が強くなれるのは何故なのか、自分なりに理解した。きっかけは数人に挑発するような口調で悪口を言われたことだった。言い返せば言われなくなると思っていたので、怖くもあつたが度々言い返すようにしていたのだが、その度に酷くなっていくことに気が付いたのである。もしかしたら、悪口を言ってくる人は私がお真に受けて言い返すことを目的にしている、それを見て笑いながら楽しんでいるのではないかと思った。そのときに思い出したのが五年生のときの出来事だった。

悪口に対して真面目に言い返すことと、挑戦による失敗で人に笑われたことをいつまでも気にすることは、同じようなものなのだと思う。人に笑われることはされた側にとつてとても悲しいことだが、笑って楽しんだ側にとつては軽い気持ちでことが多い。だから、人に笑われて繊細に気にし、挑戦することに怖さを感じてしまうと、失敗して笑われることはないが、自分が成長できない「弱い人」になってしまう。

つまり、新たなことに挑戦するなかで人に笑われることを「気にしない」ことが、人の「強さ」だと言っている言葉なのではないか。たくさん笑われることで、そのことになれることができる。だから、笑われることに鈍感になる。「何がおかしいの?」くらいに受け取れば、

新しいことに挑戦するのが怖くなくなるだろうと思った。

それまで「鈍感さ」は大事なことに気付くことのできない「弱さ」であるとはばかり思っていた。しかし、それは自分にとってマイナスになることを気にしないことができる、「強さ」でもあるのだと思い始めた。そして、私がよく「真面目すぎる」「冗談が通じない」と堅苦しく思われがちだったのは、相手の軽い気持ちを感じずに、一つ一つのことを真に受けていたからというものもあったのでは、と思った。

『笑われて、笑われて、強くなる』これが私の“忘れられない言葉”だ。太宰治は、この言葉が登場する物語の人物に自分を当てはめ、この言葉を私たちに伝えてくれたのかもしれない。この言葉は、私に、「本当の強さ」が何なのかを考えさせ、教えてくれた。これからも、私の記憶から消えることはないだろう。